

京都の伝統工芸を学ぶための教材の開発（Ⅱ）

福 岡 崇*¹

松 永 行 利*²

吉 岡 信 昌*³

〔要 旨〕

京都の伝統工芸産業の振興のための一つの重要なポイントは「良さをわかってもらう」ことである。そのために今回、ユーザーを育てるという視点から、伝統工芸品の奥深さを知ってもらうための教材の開発に取り組んだ。教材といっても従来からあるような無味乾燥な「見本」ではなく、楽しみながらより理解を深めるための「標本」的なものをめざして、昨年度研究¹⁾において検討した基本コンセプトと基本デザインを踏まえ、本年度は「絞り染め」を対象に実施デザインを展開し試作を行った。

1 はじめに

豊かな歴史と文化の中で生まれ研ぎ澄まされてきた京都の伝統工芸産業の振興のための一つの重要なポイントは「良さをわかってもらう」ことである。せっかくいいものがあるのに、その良さを知ってもらうためのアプローチをしない、あるいは例えたととしても作り手や売り手側の価値観や思い込みの一方的な説明に陥りがちで、結局は使い手(=消費者)が魅力に感じること、興味を持っていること、本当に知りたいことを伝えられていないという現状が多く見受けられ、それが顧客の開拓や需要拡大の大きな障壁となっている。この解決にはデザインを活用しての様々なアプローチが考えられるが、その中で今回はファンづくりという側面からのユーザー開拓の一つの方法として、上質な工芸品の魅力を感じられる消費者、価値を認められる消費者の育成を目的に、伝統工芸を

知ってもらうための教材の開発に取り組み、試作を行った。

2 研究方法

昨年度研究において京漆器、京焼・清水焼を対象とし作成した「いっすんキューブ」は、立体的な工芸技術標本として優れた表現方法であったが、染・織に代表される平面で完結する技術・技法を表現するには十分といえず、課題が残った。そこで、本年度は平面表現を主体とする工芸技術・技法の中から、絞り染めを対象とし、標本の基本スタイルについて検討を行った。

絞り染めは、日本においては最も古い染め分けの技法とされており、その特徴は、糊や蠟等の防染液を使用することなく、糸や竹皮（近年では樹脂製の袋も使用）、木桶などによって染めたくない部分を物理的にカバーするという、原理としてはきわめて単純なものである。そのため、同様の技法で作られる染物は世界各地に見ることができる。こういった中であって、京都の絞り染めは、その意匠表現が他の技法による模倣の対象とされるほ

* 1 産学公連携推進室 技師

* 2 産学公連携推進室 主任研究員

* 3 株式会社吉岡甚商店

ど、高く評価される。その背景には、手作業の限界まで精緻で膨大な作業だけでなく、図案の意図する世界観を表現するために細分化された多種多様な技法と、それらを組み合わせる感性・ノウハウの存在がある。

以上の点から、今回の標本では、技法による表現の多彩さを実感してもらうことを主眼において、それぞれがどのような工程で作成されているのか、その作業量がどの程度のものかを理解できることを目標に標本を作成することとした。

3 基本方針

本研究のコンセプトは「楽しみながら理解を深めるための教材」であることから、いかに楽しく・いかに感動してもらうかが重要な視点となる。そこで、絞り染めの工程において、最も興味を引くであろう点について考察を行った。

絞り染めの大きな工程は以下のとおり。

- (a) 構図
- (b) 図案
- (c) 下絵型彫り
- (d) 刷り込み
- (e) 絞括
- (f) 染色
- (g) 糸解き
- (h) 湯のし
- (i) 仕立て

これらの中で最も絞り染めに特徴的な工程は「絞括」であるため、その理解・体験ができれば、標本としての価値が最も高い。しかし、この作業は高度な熟練と技術力を必要とするため、気軽に手に取り、挑戦することは困難であり、逆に敬遠の対象になるのではないかと思われる。一方、染め上がった生地から防染している糸や帽子を解き、図柄が現れる瞬間が生地の表情が最も大きく変化

するうえ、技術的には比較的容易であり、初心者でも取り組みやすいため、標本とする工程は「染色・糸解き」部分が最も効果的であると考えられる。

次に、それらを効果的に伝えられる形状、サイズ等について検討を行った。絞り染めは着物とともに発達してきており、その図案構成や表現技法も最終的に「着物となる」ことを前提としているため、その技法の特徴を十分に引き出すためにはやはり、反物の中であることが合理的であると思われるため、標本は反物の生地巾（約36cm前後）を基準サイズとした正方形とした。

最後に標本とする技法について検討を行った。絞り染めの代表的な技法を、表現したい意匠の切り口で分類すると以下ようになる。

- (a) 点による線表現：人目絞り
- (b) 点による面表現：疋田絞り、三浦絞り、貝絞り
- (c) 線による面表現：縫いメ絞り
- (d) 面による面表現：帽子絞り、傘巻き絞り、桶絞り

これらの中から、それぞれの表現として人目絞り、疋田絞り、縫いメ絞り、帽子絞りを標本の対象とした。

4 表現のための課題と解決

標本の基本スタイルとして選択した四技法について生地巾サイズで「染色・糸解き」工程のものとする場合、いくつかの課題がある。一点目は糸解きの済んでいない生地の外見は、「糸くずやビニールの付いた皺くちやの布」にしか見えず、その時点では魅力ある姿ではないため、よほど絞り染めに興味を持っている人でなければ、染色・糸解きに挑戦する、という行動を取らせることは困難であること。二点目は、糸を解いて意匠が現れ

る楽しさだけで、そこに至る前工程に目が向かないのではないかという点である。

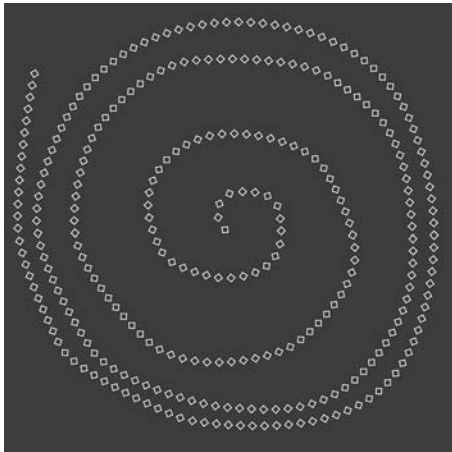
一点目の解決策として、本来の標本としての未完成品とは別に、同じ技法で作成した完成品をセットとすることにより、出来上がりのイメージを持ちつつ自分でオリジナルな染色ができる期待感も提供できると思われる。また、二点目については、標本を収めるパッケージに標本のための下絵型紙の意匠を採用することにより、工程標本として、情報の厚みを持たせると同時に、前工程へ

興味を向けさせることができるのではないかと考えた。

5 図案の作成

上記に基づき図案を作成し試作検討を行った。基本的な方向性として、特定のイメージを持ちやすい具象的な図案ではなく、技法そのものの特徴や面白さが直接伝わりやすいものとして、幾何学模様など比較的無機的なものを作成し、図案の妥当性等を職人さんも交えて検討した。

(a) 人目絞り



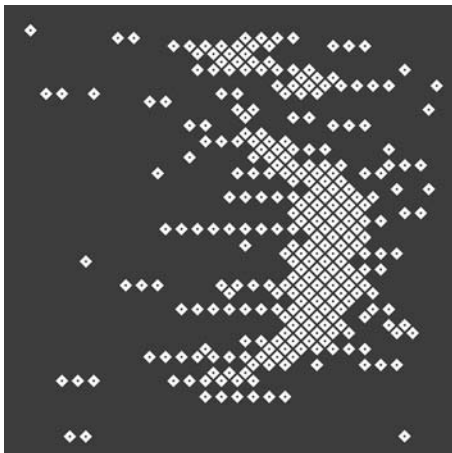
作成の可能性：可能（困難）

図案の妥当性：不適當

理由：人目絞りによる円状の図案は、生地を回転させながらの作業となるため、生地の伸び率が変化する。また絞り作業が終わった部分が順次縮んでいくため、下図に対して正確な図案が作りづらい。

(図 1)

(b) 疋田絞り



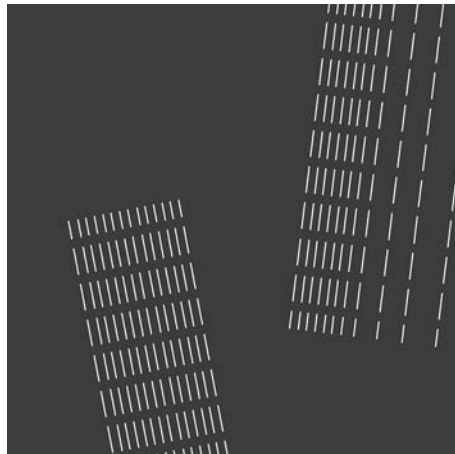
作成の可能性：可能（困難）

図案の妥当性：不適當

理由：疋田絞りは糸を切らずに次々に隣の粒を絞るため、間隔が開いて線状に並ぶ図案については糸が解ける、あるいは切れる可能性がある。逆に単独で存在する点については点として絞るためそういった問題はない。

(図 2)

(c) 縫い目絞り



作成の可能性：可能

図案の妥当性：妥当（要修正）

理由：作業としては問題ないが、図案として考えた場合、線が並んだだけの図案になる。縫い目の間隔をもう少し密にすることによって、面表現やグラデーション表現がきれいに実現できる。

(図3)

(d) 帽子絞り



作成の可能性：可能

図案の妥当性：不適當

理由：作業自体は容易であるが、絞り染めは、染料の浸み込み具合ブレが発生するため、このような幾何学的な模様を同じサイズに正確に調整することが困難で、仕上がりの印象が汚く見える可能性が高い。

(図4)

以上のように単純な図案においても、それぞれの技法の特徴から適さないものがあることがわかった。

6 パッケージの試作

工程の全体像をイメージさせるための手法として、下絵型紙を、パッケージの意匠として採用したものを試作することとした。(写真1)



標本である完成品・未完成品がそれぞれ1点ずつ収まるサイズ(200×100×18mm)を基本として、パッケージ表面に内容物の型紙イメージを採用した。

(写真1)

7 標本の試作

絞りの工程の一部を体験してもらうための半完成品（写真2）及び完成品（写真3）の試作を行い、それらをパッケージした標本（写真4）を作製した。

8 結果及び考察

楽しみながら、より理解を深めるための、量感や手触りを実感できる魅力的な教材として、本年度は絞り染めを対象として「京都伝統工芸標本箱～素材・技術編～」のデザイン開発及び試作に取り組んだ。

初年度の取り組みを基礎に、実施デザインを展開し、教育の場に留まらず、実際の商品として、より手に取りやすい形について検討を行い、一定、伝統工芸への理解を深め、素材や技術への興味を引く仕掛け作りができたものとする。しかし今回の手法では、各技法の作業性やその原理に基づ

く表現の特徴などは理解できるものの、「意匠表現のための複数の技法の組み合わせ」については、十分に伝えられるものには至らなかった。また、実際に手に取るまでの段階で、その魅力を連想させる仕掛け作りが今後の課題として残った。

また、昨年度の取り組みも含めて、伝統工芸の振興という観点からは標本のみから得ることができる情報は限られており、この標本をきっかけに伝統工芸に興味を持った人々に対して、さらなる情報を知るためのアイテムや、仕組みづくりなどが必要となってくると思われる。

（参考文献）

- 1) 古郷彰治・松井洋泰・福岡 崇・石川光治・伊藤圭一・大入達男：京都府中小企業技術センター技報、No.34、7-10頁（2006）



写真2

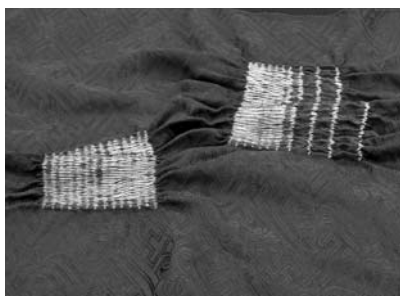


写真3



写真4